
自分の周り

睡魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分の周り

【Nコード】

N7418P

【作者名】

睡魔

【あらすじ】

周りにいろいろな人が集まってくる主人公の普段の日常。シリアス？何それ？食べれんの？そんなお話

いつもこんな感じなんです（前書き）

はじめましての方ははじめまして

お久しぶりの方はお久しぶりです

詳しくは活動報告を

いつもこんな感じなんです

午前9時。

高校2年生になってそろそろ5ヶ月が過ぎようとしているある日のこと。

絶賛爆睡中だった俺、田崎悠斗たけむきゆうとは体に何かが乗っているような重さを感じ、眼を覚ました。

「……ん……。何……だ……?」

まだ意識が覚醒していないせいか、自分が重さを感じている原因が分からない。

しばらく時間がたち、だんだんと意識がはっきりとしてきて、体も動くようになってきた。そこで俺はこの重さの理由を考える。

…布団か?

いや、そんなはずはない。昨日まで普通の布団だったのだ。俺が寝ている間に誰かが石を詰めたのだったら別だが、常識的に考えてそんなことをする奴はいない。

よし、この案は却下。次だ、次。

…じゃあ、この服?

それもないと思う。そんな服だったら寝るときに気がつくはずだ。

大体、俺はアインマンじゃない。

だから、この案も却下。

これで、ぱつと見える部分の問題は解決した。しかし、理由がまだわからない。

というわけで、おれは布団をとってみる。

すると、そこには1人の女の子がいた。

“ばつ”

俺が布団をとると、そこには1人の女の子がいた。大事なことだから2回言った。だって！普通自分の布団の中に女の子がいたら驚くでしょ！

身長は俺より少し小さいくらい。髪は黒で腰に届きそうなくらい長い。顔は…めちゃくちゃかわいい。いや。かわいいというより綺麗に近いかな？…いや、やっぱりかわいいや。

見た目的に、年齢は1つか2つ上だろう。

……いやいや、なにをこんなに冷静に分析してるんだ、俺は。

…それより、……この子だれ？

……的な展開にはならない。残念ながらこの人は俺の姉の田崎美鈴たけしみすずだ。というか、なんでこの部屋にいるんだ？俺が寝ているということは、ここは俺の部屋だ。ということはここにあるのは俺のベッドだ。なぜこの人は俺のベッドで寝ているのだろう。

確かに、俺の寝像が悪すぎて他に部屋に入ってしまった、という可能性も無きにしも非ずだが、俺はそこまで寝像は悪くない。せいぜ

いベッドから落ちるくらいだ。

ということは自ら俺のベッドに入ってきた……？

頭の中が整理出来てないが、とりあえず名前を呼んでみる。

「み 姉……？」

「…んっ……ううん……」

まだ起きて無いようで、寝返りを打ってしまった。そのせいで、み姉がおれに抱きつく形になってしまった。あ、ちなみにみ姉って美鈴さんのことね。

もちろん、こんな状況がうれしくないわけではない。ないけどね、あの、その、当たってるんすよ。思春期の俺には精神衛生上よろしくないものが。

そんなことより女の子の体ってこんなにやーらかいのね。…これ癖になりそうだわ……。

………はっ！意識が飛びかけていた……。恐ろしき、み姉。早くみ姉をどかさなければ。俺の理性が保たれているうちに。

………うん、無理だね。腕と足でがっちり俺をホールドしてるし。

俺がどうしていいか困っていると、ある人物が俺の部屋に入ってくる。

“がちゃ”

「ゆう兄いゝ。そろそろ起きた方が……」

と、入ってきた人物は俺の方を見て静止した。そりゃそうだ。俺だ
って驚いてるもん。その人物は数秒経つと正気を取り戻した。

「…って、何やってんの！ゆう兄！」

今怒鳴っているのが、俺の妹の田崎香奈。たざきかな身長は小さめで。髪は綺
麗な茶色で、肩にかかるくらいの長さだ。顔はとってもかわいい。
み 姉と違って幼さの残るかわいさだ。年齢は俺の1つ下。という
か怒る対象は俺なのか。俺は無実だぞ。

香奈が大きな声を出したため、み 姉が起きてしまった。

「ん…何……？…あ、ゆうちゃんおはよう」

「おはよう。み 姉」

「ん……。じゃあ………」

み 姉は、目を閉じて腕を広げて何かを待っているかの様だった。
心なしか顔が紅潮している。

「……何？」

「ん？おはようのちゅーだよ？」

「いや、当然のように言われても」

「……しないの？」

「しないよ」

「ちえ………」

残念そうな顔をしてみ 姉は再び眠りにつこうとする。……さらに
俺に密着する形で。これに香奈がさらに声のボリュームを上げる。

「ちょっと！お姉ちゃん！何やってんの！」

うおっ……。どうしたどうした。何が香奈の心の琴線に触れたんだ？……まあ、わからんけどあれだね、最近の若者は怖いね。

香奈の大声にさすがのみ　姉も耐えかねたのか、やっと目を覚ます。そして香奈を見て言う。

「……………どうしてここにいるの……？……香奈？」

「どうしてじゃ、……………な—————い！！！！！！！」

ついに香奈が爆発した。その気持ち、俺にも痛いほどわかる。さすがだ香奈。今、俺にはお前が天使に見える。

「大体！なんでお姉ちゃんがゆう兄の部屋にいるの！？」

「だって、昨日寒かったし……。ゆうちゃん暖かいし……………」

「それは理由になってない！大体今は夏！寒くない！」

そう、今は夏なのだ。それに昨日は熱帯夜だったし。

「そ、それに……………もうひとつ理由があるんだよ……？」

「なに！？」

香奈がすごい剣幕で聞く。……………香奈さん、怖いっす……………。

「一緒に寝たらゆうちゃんが襲ってくれるかな……………って思って」

「……………」

今あの人は姉として言うてはならないことを言った。隣では香奈が

「ふう……」と溜息をついている。

「まあ、わからないことはないけど………」

無いの！？いや、そこは分かっちゃだめでしょ！こんな会話も何回目だろう？30回は超えてると思う。ふと時計を見る。…9時3分……ああ、遅刻か……。

「とにかく！今日は私がゆう兄と寝るからね！それに、ゆう兄もお姉ちゃんを部屋に入れないこと！分かった！？」

「……うん」

「……はい………」

そう言って香奈は部屋を出て行った。

「「……………あ」「」

2人が香奈の思惑にはまったと気付いたのは全てが終わった後だった。

夏休みの大半は無駄に過ごす（前書き）

はい、2話目です

感想、コメント、ダメ出しなどお待ちしております！

夏休みの大半は無駄に過ごす

遅刻だ、なんてことはなかった。なぜなら今は全学生の味方、夏休みだからだぜ

香奈の策にはまったと気付いた後、み 姉が香奈に文句を言いに行った。

香奈にしては珍しく、おとなしくみ 姉の説教（愚痴）を聞いていた。しかし、み 姉が一通りはきだした後に俺に向かって、

「でも今日は一緒に寝るもん。…ね？ ゆう兄？」

と、言わなくてもいいようなことを言っ、み 姉の怒りを買った。どうでもいいが、俺宿題終わってないんだよね。どうしよう。

そんなことを知ってか知らずか、2人の喧嘩は俺をまきこんで行われた。…おれ宿題やりたいのに……。

言い争いは1時間続き、その後買い物から帰ってきた母親に止められた。その後しつかりと怒られたらしい。うんうん、喧嘩両成敗。

これで俺の宿題に時間がとれるかと思いきや、母さんが、

「あんたにも原因があるんだから、2人に何かしてあげなさい」

と、事実上の死刑宣告をしていった。そりゃないっすよお母様。「いや、宿題が……」と言っても、「やってないのが悪い」と一蹴された。おっしゃってることが正しいから何も言い返せない。

という訳で今、とあるショッピングモールに来ている。

「ほら！ゆう兄！早く！」

「ゆうちゃん！遅い！」

俺の3メートルほど前を行く2人のテンションは上がっている。それに反比例して俺のテンションは下がっている。何故かって？いや、そりゃ美少女2人とショッピングできれば何も文句なんて出てこないが、荷物を持たされてテンションが上がるやつはいないだろう。

そう、今俺は荷物持ち。現在の時刻は大体、午後2時くらい。あの（母さんに2人が怒られた）後、出かけることにした。いや、これは説明しなくていいか。

で、どこに出かけるかという話になった時香奈が、

「じゃあさ、服買いに行きたい！」

と言ったので今ここにいる次第だ。

11時くらいに着いた俺たちは、それから3時間ずっと服をみていた。いや、みていたのは香奈とみー姉なんだが。

3時間服をみて買わなければいいのだが、もちろんそんなことはない。さらに相手は女の子2人……。

「ゆうちゃん。どうしたの？」

「いや、…疲れた」

「どうして？」

「どうしてって……」

自分たちで持たせておいて「どうして？」って聞きやがった。これ
が同級生とかだったらぶっ飛ばしてる。だが、俺に聞き返した顔が
あまりにもかわいくて何も言い返せなかった。くっ……ひきようだ
ぜ……。

「ゆう兄ー！早くー！」

「ほら、香奈が呼んでるよ」

と、その時、み 姉のいる方向から音が聞こえてきた。

“ぐう”

「……………」

「……………」

「…………おなかすいた」

「うん。知ってる」

ということと俺たちは少し遅めの昼食をとることにした。俗に言う、
フードコート、という場所に来た。なぜか母さんが遠くで俺たちを
呼んでる。

「ほら、こっちこっち！」

「…なんでここにいるの？」

「席取っというてあげたから」

「はあ、ありがとう…。服買ってる間どこにいたの？」

「？ずっとここにいたわよ？」

実に不思議な母親だ。

さて、腹も減ったし何か買いに行こうかな。俺が立ち上がると、香奈がするりと腕をからめてきた。

「へへ……。ゆう兄、行こ？」

母さんが茶化すように言う。

「あら、お似合いのカップルね」

「でしょ？…えへへ……」

香奈が顔を赤らめて笑う。

「あつ！ずるい！」

それを見たみ 姉が俺の開いてる方の腕（右）に腕をからめてきた。

「もてもてね、悠斗は」

「勘弁してよ……」

俺は疲れたように言う。姉と妹にくっつかれて喜ぶような性格はしてない。いや、そりゃあちよっとはうれしいけどね。でもそれよりも、その、あの、や、やわらかいもの、が当たってるんですよ……。多分この2人のことだからわざとだろうけど……。その、ね？うわ、もうやだよ……。2人のことが直視できないかもしれない。こんなに近いと心臓の音とか聞こえちゃうのかな？いつも、くっつくなどか言ってるくせにくっつかれてドキドキしてるのがばれたら2人を調子に乗らせるだけだしなあ……。俺は意を決して2人の方を見る。

……うわぁ……。なんかすつげえにやにやしてるし……。しかも香奈は「うへへ……」とか言ってるし。単純に怖い。……よし、落ち着け。落ち着けば何とかなるぞ、俺。でもこの感じじゃあ無駄に、『無・駄・に』ドキドキしてるのばれたかな？ ああー、もう終わりだー。ついさっきまで軽くあしらってたのに……。明日から、いや今この時から立場が逆転しちゃうって。もし逆転したら、この2人の恐ろしいまでのアプローチをくぐり抜けなければならないのか……。いや、それは相当きついぞ。いまの時点で俺の理性は相当削られているというのに……。誰か俺の周りで頼れる人……。いるじゃん！よし、明日相談しよう。事態は一刻を争うからな。

……にしても母さんは止めようと思わないのだろうか？ きっと思わないだろうな。多分「面白そうだから」とか言っただけでほっておくに違いない。

もし俺の理性が負けたらどうするのだろうか？ いや、そんなことにはならないと思うが。あ、でもそれはそれで……。……いやいや無いつて！ 相手は姉と妹だし！ でも、もしかしたら……。いやいや！

……
おれは帰るまでこの葛藤を繰り返した。

夏休みの大半は無駄に過ごす（後書き）

さて、次回からこのあとがきのスペースで何かをやらうと思います。

まあ、その何かを考えてないんですが……。

楽しみに

3人の関係（前書き）

正月休みから戻りました。

それでは3話です。

3人の関係

その後昼食を食べ、家に帰ってきた。

さて、話し話変わるがここで俺とあの2人の関係を話しておこうと思う。

俺にいきなり抱きついたり、寝てる布団の中に入ってきたり、む、むむ、胸を押しつけてきたりと結構きわどいことをしてる（されてる）俺たちだが、実は血がつながっていない。

……なんてことはなく、普通に血がつながっている。しかし、よくいるような家族とはその体系がかけ離れている、と言っても過言ではない。

実は、つい最近まで俺たちは離れて暮らしていた。俗に言う別居とかいうやつだ。俺が中学に上がった今頃、つまり4年前の夏におれの父さんが冷蔵庫にあったプリンを『母専用』と書いてあるのに気がつかずに食べてしまった。あとでそれを知った母さんがとてつもないほどに激怒した。それはもうすごかった。家が地図から消え去るかと思うくらい激怒していた。……今考えると恐ろしくくだらない理由だと思う。

それで父さんが身の危険を感じ避難した。その時に香奈とみ 姉を連れていったのだ。普通、抵抗するものだが、俺も香奈もみ 姉もまさかこんなに長引くとは思っていなかった。それで今年の夏休みの始まる1週間前までの4年間、全く連絡を取っていなかったというわけだ。再開した理由は仲直りしたから……らしい。

らしい、というのは、俺は実際に父さんに会っていないからだ。俺はその日たまたま友達の家泊まりに行っていたし、仲直りした次の日に出張でアメリカはニューヨークに行ってしまったからだ。なので俺が家に帰ると4年前から成長した（当り前か）香奈とみ姉がいるし、母さんはなぜか超ご機嫌だし、という実に気味が悪い状態が出来上がっていた。

余談だが、久しぶりに2人を見たときに、一瞬だけドキツとした。い、一瞬だけだぞ！しかもその日の夜に2人から「絶対振り向かせるからね！」という謎の宣言を受けてしまった。聞いたときは何のことだか分らなかったが、次の朝、目が覚めたときに2人が俺のベッドに入っていたのを見て「あ、こういうことね……」と気付いてしまった自分が憎いと思う。まあそのうち2人とも飽きると思っ
ているので、気にはしていないが。

さて、話を現実に戻そう。

俺は家に帰るとすぐに2階に上がり、自分の部屋のベッドに横たわった。

「はあゝ、疲れた……」

今日は本当に疲れた。朝の騒動（いつもの事だが）もあり、さらに買い物に付き合わされる、という地獄めぐりをしたのだ。疲れない人間がいたら見てみたい。

そういう経緯を経て、ベッドに倒れこんでいる。すると、部屋のドアがいきなり開いた。

「ゆう兄？起きてる？」

香奈だった。手に先ほど買った服が入った袋を持っている。どうでもいいがノックくらいはしてほしい。

「ゆう兄、ごめんね。今日は無理矢理付き合わせちゃって……………」

香奈が謝ってくる。普通なら文句の一つも言うのだろうが、こんなかわいい妹（他意はないぞ）怒れる兄がいるものか。俺は「別にいいって。俺も楽しかったし」とだけ返しておいた。

「という訳で、今日のお詫びも込めてゆう兄の為にファッションショーをしたいと思いまーす！」

「…………え？」

「ファッションショーだよ？ファッションショー。うれしくないの？」

「いや、まあ」

「でしょ？じゃあ着替えるからちよつと待っててね」

そう言つて、いきなり服を脱ぎ始めた。

「え、ちよつ、香奈！」

「ん？何？」

「なんで脱ごうとしてるんだよ！」

「着替えるためだよ？」

「いや、なんでここで」

「興奮したゆう兄が襲ってくれるかな？とか思ってる」

…ふう。妹が暴走してきてるZE 冷静っぽく話してるけど、内心めっちゃめっちゃドキドキだZE

「と、とにかく着替えるならここ以外でな…?」

「そんなこと言っちゃって。本当はすっごくドキドキしてるんでしょ?」

「そ、そんなことねえよ!」

妹はエスパーか何かか。

「お前……。俺が本当に襲ったらどうするんだ?」

そんなことは無い………と思いたい。

「……ゆう兄が初めてなら…大丈夫だよ……?」

今俺の目の前にいる人は妹として言うてはならないことを言った。

朝のみ 姉に続きなんなんだ。朝の姉、昼の妹。なんかことわざにありそうだな。

というかこれは兄として、いや、人として矯正する必要があるな…。

「…いいか、香奈。俺と香奈は兄妹だ。兄妹、兄妹、兄妹」

ゲシュタルト崩壊するまで言う。

「で、普通の兄妹はこんなことしないよな?」

「でも……」

「でも、じゃない」

言い訳しようとする香奈の言葉を遮り、続ける。

「確かに、俺は香奈の事が好きだし、愛してる。でもそれは家族と

して、兄妹としてだ。それじゃ駄目か？」

「だめじゃない、けど……。……でもっ！てんでも私はもう……ゆう兄のことをただの家族としては見れないから……」

香奈の言葉を聞き、俺は溜息をつく。香奈はそこまで考えていたのか……。俺も香奈に対する認識を改めないとな……。……いや、それは無いが。

俺はどうしようかと思いいベッドに腰かけると、部屋にいきなり姉が入ってきた。この姉妹はノックをする、ということを知らないのだろうか。

「んー？何してんのー？」

み 姉は服を脱ぎかけた香奈と、ばベッドに座ってる俺を交互に見て、驚いたような顔をして、香奈を連れて出て行った。ちよつと姉としてきつく言っしてほしいと思う。外から「そういうことするなら次は私も混ぜること！」とか聞こえてくる。前言撤回だ。巨悪の根源はあいつだった。

しばらくすると2人が入ってきて、「ゆう兄、いつか続き……しようね……？」「なに！？続きってなに！？なにしたの！？」と騒いで出て行った。続きってなんだ。何かを始めた覚えはないぞ。しかも、香奈はさっきの事を全く気にしてないらしい。こりゃ止めるのは難しいな。

とにかく、部屋が静かになり、やっと俺に平穏が訪れた。……よし、昼寝だ。こういつときには寝るのが一番だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7418p/>

自分の周り

2011年10月7日22時22分発行